

日蓮上人一代記全

特36
891

020046-000-4

特36-891

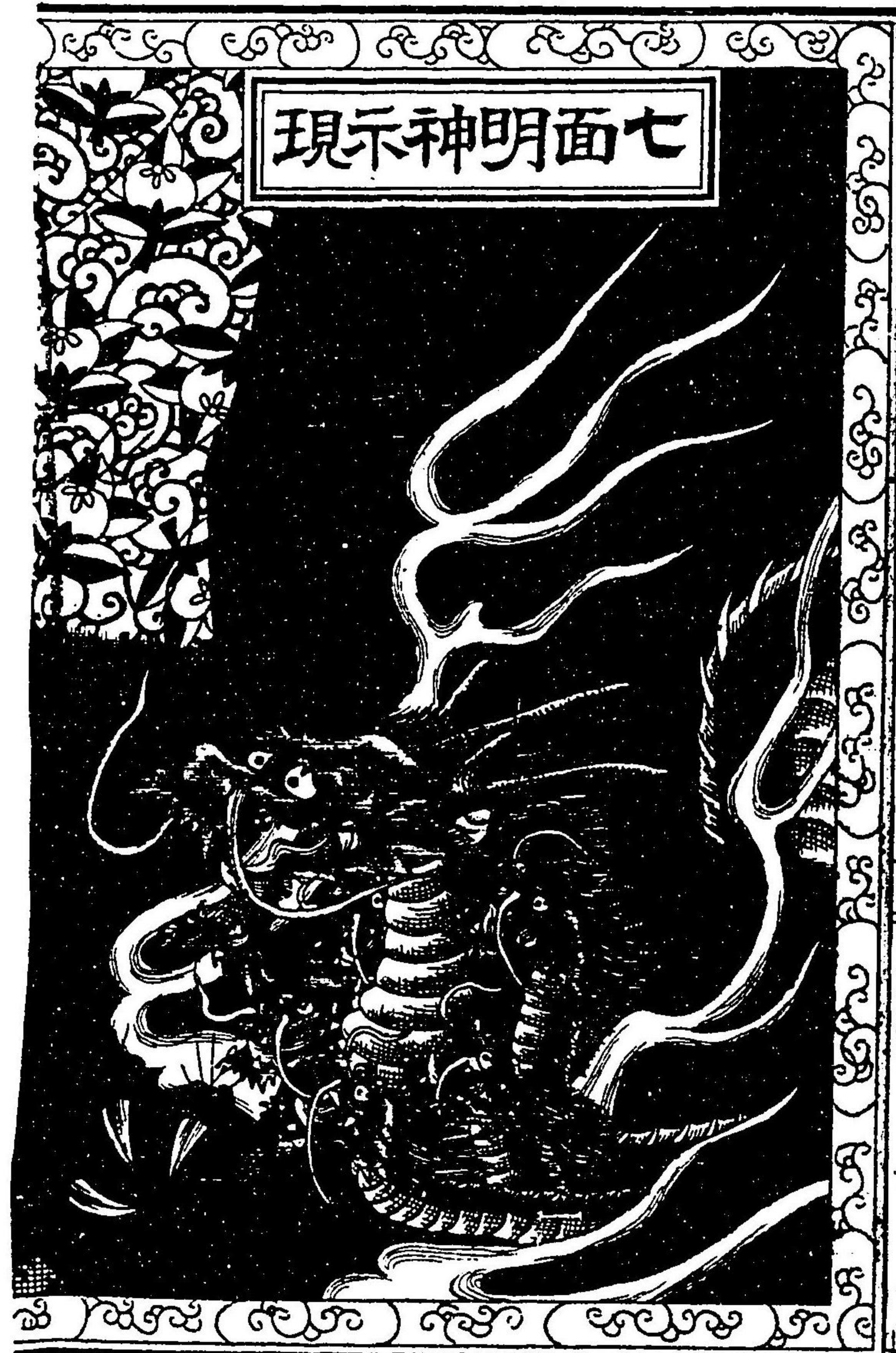
日蓮上人一代記

尾関 トヨ / 著

M22.6

ABH-0241









高祖大龍口御難

日蓮上人



依地直重

岩瀬大輔



日蓮

梅菊女
郎重
年夏の初

日輪懐中

妊身
の春安房小湊の沖
蓮の生出る咲初止浦
目出度奇瑞多かりしが同
二月十六日午の刻玉の如き

改め給ひしが悉達太子



日蓮

男子生れ種々の奇瑞
日天子の吉瑞とて
右小法華經王の利益
流通し給ひし大聖
佛滅後二千五百
萬態をとりて
大人の如し貞
七才の時天子
と恩びな
日二十才道善と師
名と兼王
あよみ住
と師の

十九才にして王冠錦衣
まぐさ麻の衣と身纏ひ
檀特山に分登り給ひし昔
を思ひ出されて衣れゆ
尊くふそ
口御名を是
生坊蓮長と改め
諸事を擲棄
真言瑜伽の弊
藏と學び晝夜
肝を碎き可思
ひ給ふ弘法と言ひ
釈迦一代の法あるを八宗
と立別れし疑ひ多しと
大海の潮に二の味あく如米
の教法もまごの道ハ

喜貞五年の秋
五



伴ひ当山の
 本尊座
 空藏菩薩
 宝龜の用明以米利
 益多うる靈像とさひ
 ば茲の祈願とてその本
 旨ぞ知とやと絶食ほ給ひ
 御堂ももる本願のまじり

廿六年の難儀日であられど
 尚ほけりく餓死もの病死者も者ふて
 尸をうて山をなす実ふあられり日蓮
 大士あつこれと歎れ法華經の弘通の時節
 ありと諸宗の邪義ふとられて正法はよと
 天にうもあつて此事と鎌倉(許)

時續公
 火代藏
 証の鏡
 みつけ
 日本國
 とき書
 正安國
 論と云
 書あり
 縁ごと
 前の
 執権



益興藏と極め古御のまじり
 西親小見(卯月二日)室かこり
 香とて大禪定ふるの時御
 年三十三建長五年四月廿八日東空
 朗に旭天かゝた時安祥か三
 味あり起るひ念珠とてやへ
 り乍旭日か向せられ二十五百
 一年の首大聖尊より上行菩薩
 小附属あり二呼百苦の金言木法
 相伝の本因下種の題目とある
 り南無妙法蓮華經と十遍とある
 の高祖大士鎌倉より又日朗師
 と持て房州小湊の至り慈母を慰
 百ヶ日の仏事とて鎌倉ふり
 ころひり此時小諸國大飢饉

立正安國論とて時小文應元年七月
 十六日大士奉行宿谷左工門光則の邸
 到り拙僧日蓮と云者小侍り近年

時續公
 のけん
 えん

日蓮

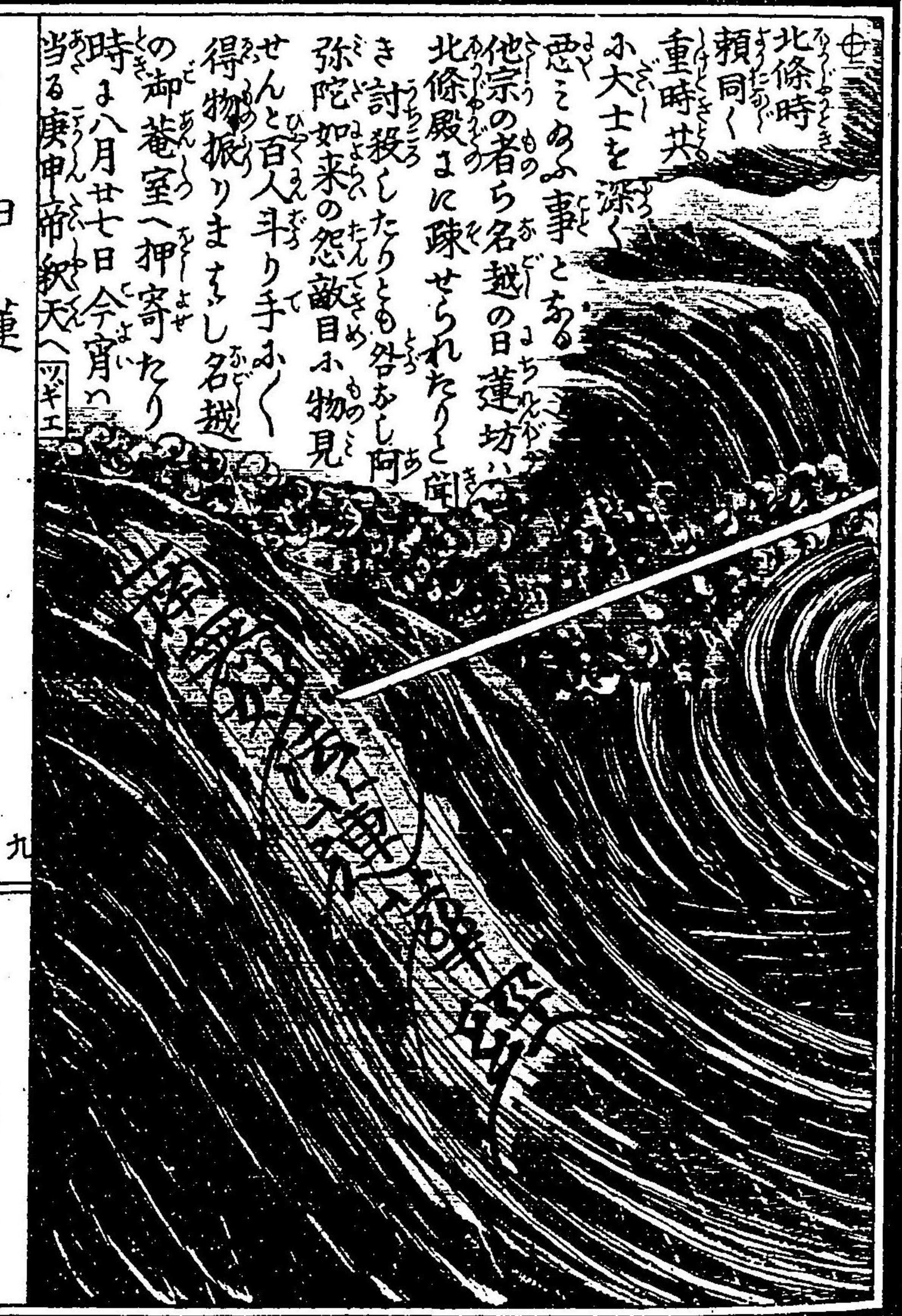
日蓮

文



日蓮

備へられとて一
巻の書と差出
しなれ左門
光則請取り
此旨披露
ひたるに



北條時頼
重時共
小大士を深
悪この事とある
他宗の者ら名越の日蓮坊
北條殿に疎せられたりと聞
き討殺したりとも各あし阿
弥陀如来の怨敵目小物見
せん百人斗り手ふく
得物振りままし名越
の御菴室へ押寄たり
時よ八月廿七日今宵ハ
当る庚申帝釈天ハ

日蓮

九



ツギ 法樂の御
 讀誦と終り夕ひ
 月も出るや
 遣戸細めふ
 押明て東の
 空と見や
 むの白き猿
 来り大士の御
 袖と引けれ
 是不ん何
 あるもの奇し
 ふやと思ひ
 彼も曳れて行
 むふま路い
 き山づつひ東の

宗幼少よつき
 此時執權時
 日々盛あり
 宗幼少よつき

東をさして七八町なる山堂
 奥山の密窟洞ふまき表り
 大士西の方を顧りぬふに
 我菴室と思ふ方物音
 哄の声して猛火焰
 燃揚りけまを皆ハ我
 室の焼失あるやと思
 けり此夜御菴室
 ハ進士善春皆無
 迷り是人王帝
 釋天の加護始めて
 大士も悟られ
 孫折伏弘通の
 為ふ諸宗の僧俗
 衆子壇越とある者



重時の子長
 時天下の政事
 を補せしめ
 長元年五月十日大士
 由比の濱より伊豆の
 伊東へ流罪す左
 之丞吉隆大士を
 歸依し招待
 あり日朗日朝
 日照其他徒
 數十人
 人小松原
 と過る
 東條



ツギ 法樂の御經
 讀誦と終りぬい
 月も出るや
 遣戸細めぬ
 押明て東の
 空と見や
 来り大士の御
 袖と引けれを
 是不ん何々
 あるとの論し
 ふやと思召
 彼ま曳れて行
 き山つひ東の

日蓮
 宗幼少よつき
 此時執權時
 日々盛あり



東をさして七八町なる山堂
 奥山の空屈祠ふなき奉り
 大士西の方を顧りぬふに
 我菴室と思ふが物音
 哄の声して猛火燄々
 燃揚りけきを借ハ我を
 室の焼失あるやと思
 けり此夜御菴室
 ハ進士善春皆無
 是迷り是人王帝
 釋天の加護始めて
 大士も悟られなり
 翁折伏弘通の
 為ふ諸宗の僧俗
 衆子壇越とある者

重時の子長
 時天下の政事
 と補せしめ私
 長元年五月十日大士
 由比が濱より伊豆の
 伊東へ流罪す左近
 之丞吉隆大士と
 帰依し招待
 あり日朗日朝
 日照其他徒
 數十余
 人小松原
 と過るふ
 東條



景信二百余人の士
 ぶ下知して前後
 と取圍と唯一ホと大
 は切替る大士御額
 三枚のまきうけさ
 ら危き其場を
 もひ後み本間三郎
 ふ懐と玉ふて室内
 識經はしぬ頃九月
 十日の各月大士庭
 下り自我傷を誦論
 終りて
 月は對
 ぬ月天行
 日朗
 日朗
 日朗

日朗
 終りて
 月は對
 ぬ月天行
 日朗







打立ける文永十年四月廿五日大士
 一書と認め七月八日初て大曼陀羅
 十界の本尊と書のみまよ
 説法あしひしうしう美
 ひ女大士の本尊と賜と請大士
 紅の袖は題目とらき側ら
 紅の袖は題目とらき側ら
 の神はひしうしう美
 の神はひしうしう美



満三年在せしも日
 朗八度訪ふと諸
 の僧教百人申合せ来り
 大士と法論に及ぶ一々
 破られり大士此際重連
 示して女鎌倉に合戦起らん
 とを教しも其意をさうりし
 さて軍始りぬとの注進は初て大士の智
 識驚き壇家とありて一旗を引具し



會坐ふ在しあから靈山の終末
 ぬひしうと天邊
 かしぎや天邊
 ききもり大星梅
 櫛の陰り諸告
 ありしと後佐渡
 流罪とありし
 海上凡逆として船
 覆らんと危所
 大士船の袖前も立ゆて
 櫛をとりて海面ふ龍無妙
 蓮華經と書めを白波の
 其文字曉らちよ浮と懸
 不思議めと雲凡たちまちや
 大士は船をとりて

時とき 社しゃ 其その 其その 有あ 大おほ 永なが 十じゅう 年ねん
 二に 月げつ 八はち 日にち 時とき 宗そう 夢む 小せう 童どう 子こ 来き 日にち 蓮れん 七しち 放はな
 空くう 一いつ 門もん 滅めつ 亡じやう 主しゆ 又また 賴らい 綱かう 同どう 夢む の じ 故こ
 後ご 徒た 弟てい 日にち 朗らう 衰すい せ 師し の ち へ
 天てん の 聖せい ち ち 尼に 高かう 祖そ の
 か へ 多た 志し き 行ぎやう けり 大おほ 士し 鑿さく ち
 小せう 坂ばん り 時とき 宗そう 小せう 調てう じ 法ぽう 華け
 宗そう 門もん 弘こう 通つう 免めん 状じやう を 賜たま へ
 甲かう 州しゅう 小せう 室しつ 山さん 主しゆ 大おほ 士し
 けん 者しや と 尚かう 答たう の 赤せき 大おほ 石せき
 験けん 者しや 祈き 奉ほう 公こう 空くう 中ちゆう に 止と じり
 けき 主しゆ 大おほ 士し の 中ちゆう 公こう 此こ 石せき を
 おろして 見み よとの 仰かう せ せ 験けん
 祈いのち の 由よし 下くだ し 難がた く 大おほ 士し 空くう に 止と じり
 あふ 故こ ありと 汝なんぢ 志し 法ぽう 力りき た
 我われ こと 題だい 目め と 大おほ 公こう の 志し 速すみ 速すみ に 石せき
 地ち 下くだ を 落お ち たり 夫おの 主しゆ 小せう 室しつ 大おほ 士し を 奉ほう り 然しか ち 後ご
 多た 少せう しくしと 大おほ 士し 甲かう 州しゅう 石せき 和わ 川せん 以もつ 鴉あ 飼かい の 靈れい と さい かい
 其その 由よし 之これ 疲つか 世よ 人ひと の 老らう 翁う 来き り 大おほ 士し と 芦あし の 網あみ 戸こ
 ある 家いへ 伴ばん ぬ 我われ 日にち を 業ごう として 物もの の 命いのち と じり

四 四



日蓮



ソキ
大士を伏拝
御經の力みく罪
障の闇とん

日蓮

是未法鎮守の七面大明神
ありかたも蒙古浪治現証利ゆ其
他種々の利益天験弘通せりつひ小
大士死期とるの池上りりり經々
御遺言入威とん御廟と身延
まき諸願満
妙法一天四海
ふりやん
け



偏ひん聖人せいじんの賜たまものと喜よろこぶ言ことあり
てまあ明方めいほう近ちかくありありなりなりくく太
身延しんえんの山やまををひらひらけけ沢さわ辺べのの巖いわ不ふ坐ざし
説法せっぽうをを給たま時とき美み人ひとのの女むすめ聴き聞きこせり
説法せっぽうをを高たか祖そ其その女むすめととりりてて本ほん体たい
とと頭かぶととありありんんがが笑わらととややとと我われのの佛ぶつ勅とく
と受うてて大だい法ぽう守しゆ護ごのの為ため当あた野のりり西せいののをを
春はる木き川がはのの山やま上の上おお四し方ほう八はち面めんのの嶺ねととまま入い良らのの
一い方ほうおお安あん住じゆ利益りやくとと七しち面めん不ふ通つう
圓えん満まん具ぐををくくとと父ちちとと鬼おに子こ母はは
と母ははとと言こと祥さむら天てん女むすめありあり聖せい人じん
願ねがひひ我われ一い滴てつのの水みづとと恵めぐみみああるる
べしと大だい士し花はなととのの水みづとと子こををけけれれ晴は天てん
俄いにに雲くもととかかじじ少すく女むすめ忽たちちち二に丈ばうのの蚊か
竜りゆう七しち頭とうのの形かたちととるる西せいととははととをを飛と去さりりけけるる

勘作天
板権
明治二十二年九月一日印刷
全一冊
下谷区車坂町六十二番地
印刷
日本橋区若松町十五番地
著作
尾関トヨ

